

## 廃屋のカナリアートニ・モリスンの『ラヴ』における 女どうしの絆

鵜 殿 えりか

トニ・モリスンの小説には、鳥のイメージが数多く登場する。飛ぶことをテーマとした『ソロモンの歌』（1977）、こまつぐみの大群とともに現れるスーラ、『ジャズ』（1993）の同じ言葉を繰り返すオウム、『マーシィ』（2008）では鳥はフロレンスの暴力的衝動の象徴となる。本論では、モリスンの第八作『ラヴ』（2003）が鳥のイメージによって何を語ろうとしているかを探してみたい。この小説の主要な舞台はとあるホテルである。ビル・コージーという黒人男性によって一九一〇年代にジョージア州の東岸に創設され、富裕な黒人のための最高級リゾート・ホテルとしておおいに繁盛したが、人種統合が進む六〇年代になると黒人客はだんだんと離れていき、コージーの死後とうとう立ち行かなくなる。物語現在の時点では、空家になり長い間使われていないそのホテルにはたくさんのカナリアが棲息し、たるきの間を飛んだり囀ったりしている（235）。

物語はアメリカの現代史をたどるように進行する。一九一三年、五歳のLは若いコージーが妻のジュリアを海で抱きしめているのを見て、彼に憧れをいだく。その後Lは病気のジュリアに代わってコージーの家庭を切り盛りするようになり、五十年間にわたり料理人としてホテル経営を支える。その成功のかけで一人息子のビリーボーイが死に、コージーは希望を失う。一九四二年、五十二歳のコージーは、十一歳の少女ヒードと結

婚する。この少女が孫娘のクリスティーンの親友であったことが、事態を決定的に悪いものにした。ヒードとクリスティーンはこの時から激しく対立するようになる。クリスティーンの卒業と誕生日祝いをかねたパーティの日、二人は争い、怒ったヒードがクリスティーンの部屋に放火したことから二人の決裂は決定的なものとなり、クリスティーンは自宅を出て行かなければならなかった。月日は流れて一九七一年、コージーは亡くなる。彼がメニューの裏に走り書きした遺言状が見つかり、その中の言葉「愛しいコージーの子」というのが誰かということが裁判で争われ、結局それはヒードだと認定され、彼女が財産を相続した。かつて栄えたホテルは衰退しようとう閉鎖された。クリスティーンが家に帰った日から二十年以上もの間、二人は同じ屋敷に住み互いに憎みあいながら、過ごしてきた。物語現在（一九九五年から九八年の間のいつか）、ジュニアとローメンという十代の二人の物語が副プロットとして展開する。ジュニアは関節炎のために手が使えないヒードの秘書として雇われる。ヒードは、相続の再審要求をしようとしているクリスティーンに対抗するために、偽の遺言状を捏造しようとしていた。ヒードはジュニアにコージーの筆跡を練習させ、ある夜廃屋となったホテルの屋根裏部屋に忍び込み、古いメニューの裏側に偽の遺言を書きつけさせているところに、クリスティーンが現れる。しかし、裏切り者のジュニアは、ヒードが立つ場所の絨毯を足でたぐり寄せ、バランスを失ったヒードは階下へと転落する。車で逃げるジュニア。女二人はホテルに取り残されるが、そこで二人は和解する。大けがをしたヒードは夜明けを待たず死ぬ。

## 語り手Lの謎

この小説は、一人称の語りの部分（斜字体）と三人称の超越的語りの部分とに分けられる。一人称の語り手はLという登場人物で、物語冒頭

(3-14)、第三章 (94-102)、第四章 (154-164)、第六章 (209-219)、第九章 (305-310) の五箇所です。この語り手は、前作『ジャズ』の語り手とは次の点で違っている。第一に、Lはこの物語に直接関与する人物(ホモディエゲーシス的語り手)であること、第二に、Lの語りはこの小説を解くカギになるような重要な情報を含んでいる、という点である。ただし、ジーン・ワイアットが言うように最終的にLの声が「真実と権威の声」(200)となるかは、疑問である。Lの語り終始不安定で自己中心的であることは、『ジャズ』の語り手と同様である。Lが語る小説のエンディングで、コージーの死は、L自身が毒を盛ることによってもたらされたものであることが明らかになる。その毒はジキタリスという野草だが、それはLの冒頭の語りの中に何気ない風に挿入されていた(9)。物語の中でコージーの突然の死に対する不審は何度か表明されるが<sup>(注1)</sup>、死の謎は最後まで明らかにならない。死の苦しみにのたうち回るコージーの側にはLがいたが、物語の中の誰も彼女を疑うことはない。というのも、Lがコージーを殺す理由が、物語言説上はまったくないようにみえるからである。

小説の最後で、Lは、コージーの老年の無軌道ぶりを、彼の命を奪うことによって止める必要があった、と告白する。コージーが一九六四年時点で公証遺言状を作っていたことはLも知っていたが、その内容が、すべての財産を彼が長く愛していたセレスシャルという娼婦に与えるということであることを、七一年彼女は知る。セレスシャルは、ホテルを運営したり財産を適切に管理したりすることのできるような人物ではない、とLは言う。コージーは自らの成功の夢が破綻したことを知り、その責任を身内の女性たちに転嫁した。外目には老いの静かさの中にあると見られていた彼の晩年は、社会や身内に対する激しい怒りと復讐心に満ちたものであったことが明らかになる。Lによれば、彼がヒードと結婚したのも、少女愛好癖とか、跡継ぎが欲しかったことの他に、父ダニエルへの復讐のた

めでもあったらしい。コージーの残忍な意図を阻み、ホテルや財産を守り、彼の妻や子に相続させるために、Lは彼の公証遺言状を破り捨てたのだと言う。この公証遺言状のかわりに、一九五八年にコージーがメニューの裏に走り書きをした遺言状が出てきて、それが公式の遺言状と認定された。その遺言状は、息子の妻メイにホテルを、「愛しいコージーの子」にその他の財産を与えるという内容であった<sup>(注2)</sup>。セレスシャルが相続していたら、財産を失うかわりにヒードとクリスティーンが争い合うことはなかったかもしれない。愛を意図したものが憎悪を生み出す一方、悪意であったものが和解をもたらすこともある。人間の営みがいかに偶発的で、非合理的で、不可思議なものであるかが冷徹な筆致で描き出されている。

こうした愛憎劇の中で、語り手であるLだけはそのような愛憎から超越した高みから、中立的に語っているようにみえる。しかし実はそうではない。「中立性」は語り手という特権的な立場が作りだしている幻想である。語り手Lも愛憎に引き裂かれる登場人物たちの一人なのである。Lは幼い時、海の中で妻を抱く二十四歳のたくましい黒人青年コージーを見て胸騒ぎを覚える(96)。それから九年後、彼の妻ジュリアが病床にあった時、十四歳になったLはコージーが家事手伝いを探しているのを知り、自ら訪ねて使用人となり、以来、五十年余彼を支えて働くことになる。ジュリアの死後、Lは実質的にホテルを切り盛りする女主人のような存在となり、ビルの一人息子ビリーボーイの母親がわりとなり、ビリーボーイの死後は遺児クリスティーンの世話も引き受けた。「それがこの世でもっとも自然なことだった」し、コージーは妻を深く愛していたが、彼の愛には「まだ大きな余地があった」とLは言う(155)。しかし、一九四二年、五十二歳のコージーはクリスティーンの友人ヒードを見初め、十一歳の彼女と結婚し、Lや、夫や娘よりも義父コージーを第一に考えてきたメイ、クリスティーン、ヴァイダたち従業員、コージーを愛し尊敬していた女たちを唾

然とさせた。Lはその時から本当のホテルの衰退は始まったと見る。

前記のように、Lはコージーと正式に結婚してはいなかったが、結婚したも同然の生活を送ってきた。物語中彼女がコージーを語る言葉だけが、彼の性的な魅力を伝えている。海の中で妻ジュリアをかき抱く若いコージーの姿を見たLは、感動の涙を流す(95-96)。彼はLにとってまさしく「王子様」だった。第四章で、最初Lは海を「私の恋人」と呼んでいるが、最後には海はコージーへと変化する。

私は恋人をポーチから見るができる。たいてい夕暮れ時、夜明け時でも、彼の肩に海の泡がまとわりついているのを見たいな。昔はここに白い藤椅子が出ていて、きれいな女性たちが、ジャックダニエルかカティサークを一滴垂らしたアイスティーを飲んでいた。今ではもう何も残っていないから、私は手すりに肘をもたせかけて、階段に坐るよ。もし私がとても静かにして(*If I'm real still*)、注意深く聞いたら、彼の声を聞くことができるよ。あんなに力強い声だから、みんなは彼の声はバスだと思っているだろうけど、違うね。彼の声はテノールなのさ。(164)

この時Lは、コージーの声が本当はテノールであることを自分だけは知っていると言い、彼との性的な関係をほのめかしている。

上記の語りの部分には仕掛けがあり、“*If I'm real still*”に「もし私はまだ現実のものならば」というもう一つの意味を読み取ることができ、Lがすでに死んでいることの暗示となっている。語り手Lがこの世のものではないことは最終章になるまで明らかにはされないが、所々に暗示はある。例えば以下の引用のように。

私の本当の名前を覚えている人はみな死んでしまって、今では誰もたずねもしない。時間がたっぷりある子どもたちでさえ、私が死んだみたいに扱って、私のことを知ろうともしない。私の名がルイズカルシールだと思っている人もいた。受付の鉛筆で教会献金の封筒にLってサインしてたからね。私が呼ばれたりするのを聞いて、エレノアかエルヴィラのLだと言う人もいたね。みな違っているよ。(97)

Lは、「あんたの名前が『コリント人への第一の手紙』第一三章の主題だったら、当然それに関与していくでしょ」(306)と言い、自分の名前が「ラヴ」であることをほのめかしている。というのも、その主題は「愛」だからである。したがって、この小説のタイトル『ラヴ』は「愛」を意味していると同時に、この語り手L＝ラヴの名を意味していると考えてもいいだろう。つまりLはこの物語の脇役ではなく主人公なのである。

小説の終り近くになって初めて、クリスティーンとヒードの口から、物語現在の時点では、すでにLはこの世にいないことが明らかにされる。

彼女どんな風にして亡くなったの？

どんなだったと思う？料理中に亡くなったの。

チキンを揚げてる時？

まあそんなところね。ポークチョップを蒸し煮にした。

どこで？

メーシオーのカフェテリアで。コンロの前で倒れるようにして死んだの。(290)

二人の会話から、Lは一九七一年のコージーの葬式と同時にホテルを去り、カフェテリアでシェフとして働いていたが、七二年から七四年間のいずれ

かの時期に亡くなり、彼女の葬式が営まれたことが明らかになる。したがって、一九九八年ジュニアがカフェテリアに来るのをカウンターの内側から見た、と語る L は、生きた人物ではなく、俗な言い方をすれば、幽霊なのである。

L とは何者なのか？ 彼女の重要性は、ヒードとクリスティーンの関係と同じ関係が、彼女とセレスシャルの間で繰り返されていることにある。いや、この言い方は正確ではない。L とセレスシャルとの間で展開した隠されたプロットが、ヒードとクリスティーンの間で反復されようとしているのだが、それが前のプロットとは違うように変奏されるのを、L は見守るのである。

小説の冒頭、L の語りは「女たちの脚は大きく開いている」で始まる。彼女の関心はアップビーチに出没する娼婦たちにある。そして、仲間どうしの争いで顔に切り傷をもっているような娼婦でも、心には魅力的な子ども心があると言う。そのような娼婦のひとりがセレスシャルである。数多くの女と浮き名を流すコージーだが、長年にわたってセレスシャルと愛人関係にあった。妻が死んだ後からずっと、ヒードとの再婚後数年間をのぞいて彼はセレスシャルと関係を持ち続けた。彼はこの娼婦を深く愛し、結婚も考えていたことがうかがえる。彼が銀器に刻ませた二重の C の文字は、クリスティーン・コージーではなく、セレスシャル・コージーを意味していた。L は、夜の海でセレスシャルとコージーが逢い引きしているのを目撃する。先にコージーが帰った後で、ひとり裸で海に入るセレスシャルの美しさに彼女は息を呑む。

頭上の切れ切れの雲が月を横切って流れた時、私の心臓がどんなにどきどきと鼓動を打ったか、よく覚えている。(中略) 私は彼女の腕が描いた弧を昨日のことにように覚えている。彼女はしばらくの間視界

から消え、その間私は息を止めていた。彼女が水面に浮かぶと、私は息をとりもどし、彼女が浅瀬の方へ泳いで行くのを見守った。(中略) それから、そう、彼女は声を発した。それは言葉だったのか、旋律だったのか、叫びだったのか、今日まで私にはわからない。わかるのは、それは私が返事したくなるような音だったということだ。セレスシャルと。ふだん私は石のように無口なのだが。(163-164)

Lはコージーを見た時ですら、このような深い感動を覚えはしなかった。Lは一目でセレスシャルに恋したのである。

Lの人となりは「石のように無口」という表現から垣間見られる。彼女は「賢明」で「思慮深」く、「沈黙」が大切だと考えている(3)。このようなLの寡黙さのゆえに、Lとコージーの関係を疑う者もなく、彼女の彼に対する愛憎に気づく者もなかった。Lがコージーを殺害し遺言状を破り捨てたのは、家族やホテルを思っただけのことと言っているが、それを額面どおりに受け取るべきではないだろう。彼女によるコージー殺害は、彼がセレスシャルにすべての財産を与えると遺言したことに関係があるのではないか。セレスシャルとコージーのそれぞれに対して深い愛憎を抱くLは、コージーの遺志を知って、激しい嫉妬にかられたのではないか。しかし、結末場面では、Lとセレスシャルは二人してコージーの墓を訪れている。セレスシャルが歌う歌はコージーへの愛に満ちているが、「自分だけのため」の何かを取り戻したい、とLは思う—

でも、時おり彼女の声はあまりにも彼への思いでいっぱいになる。それは仕方ないね。でも、いくらかでも取り戻したい。私だけのためのいくらかを。だから、いっしょに口ずさむのさ。(310)



この引用部分から、Lの愛はコージーよりむしろセレスシャルに向けられていることがわかるだろう。このセレスシャルへの愛は、ヒードとクリスティーンとも共有するものである。彼女たちも美しいセレスシャルに憧れ、「ヘイ、セレスシャル」という二人だけの合い言葉を作っていた。Lとセレスシャルとの間に存在したような愛が、ヒードとクリスティーンの間にも存在したことが、その言葉によって暗示されている。

### 廃屋のカナリア

ヒードとクリスティーンの関係について見てみよう。Lは、ヒードとクリスティーンの間には特別の、純粋な愛情が存在していたことを見てとっていた—

子どもが互いを好きになる時はそんな風さ。瞬時で、なんの前触れもないのさ。(中略) そんな子どもたちが、自分の性別もわからないうちに、あるいは誰が貧乏で誰が金持ちかも、白い肌と黒い肌の違いもわからないうちに、親戚と他人も見分けられないうちに、出会ったとしたら。彼女たちは、それなしでは生きていくことができないもの、敗北と反抗の入り交じったようなものを見つけてしまったのさ。

おおかたの人は、それほど幼くしてそれほどに強い情愛を経験したことはないだろうね。(305-306)

ヒードとクリスティーンは出会ったその時から、性、階級、人種の境界を超えて引かれ合った。お互いを愛する気持は出会った瞬間に生み出された。このような瞬時に生み出される純粋な情愛は、『スーラ』、『タールベイビー』にも描かれていたし<sup>(注3)</sup>、Lが月光に照らされるセレスシャルを見た時に湧き上がってきたものでもある。

しかし、多くのことが二人の愛情に亀裂を入れるために介入してくる。そのもっとも大きなものがビル・コージーによる介入である。彼の介入により二人の間に初めて秘密が生まれ、二人の決裂の種子となるのである。その事情はクリスティーンとヒードそれぞれによって物語の終り近くで明かされる。ある日、ホテルの裏口で水着姿のヒードと出会ったコージーは、水着の上からヒードの乳首を愛撫した。地域の人々から尊敬され憧れの的であり、中年ながら魅力的なコージーの愛撫に、ヒードは驚きつつも性的な興奮を覚え、同時にそのような自分を嫌悪するが、彼女はその様子をクリスティーンに見られ、軽蔑されたと誤解する。しかし、クリスティーンはその現場を見たのではなく、別の場面を目撃したのである。彼女はヒードを追ってホテルまでくると、自分の部屋の窓際で、コージーがズボンの前をはだけて、眼をつむり、忘我の状態でマスターベーションをしているところを目撃する<sup>(注4)</sup>。彼女は祖父が自分を夢想して性的行為を行っていると、嫌悪感から嘔吐するが、彼にそのようなことをさせる自分の中にあるらしい汚れを恥じて、そのことをヒードに打ち明けることができなかった。ヒードもクリスティーンも、コージーを嫌悪する以前に、自らを恥じ嫌悪していた。

少女たちが話すことのできなかったのは、まったく不快というわけではない性の目覚めのことではなかった。それはまったく別のものだった。何故かはわからないけれど、この恥だけは別もので、決して—自分たちが作った秘密の言葉ででも—打ち明けることができないものだと、二人は互いに考えた。

内部の汚れは外に滲み出ていくのだろうか？ (296)

なぜ、二人は自分を恥じなければならなかったのか？ その理由は家父

長権力にある<sup>(注5)</sup>。英雄と見なされている男もしょせん「愛憎に引き裂かれる普通の人間」だ、とLは見抜いている(307)。しかし、その男は共同体の人々によって神格化され、絶対化されているが故に、誰も彼に対して批判したり異議を唱えたりすることができない。幼い者、無力な者であればなおさらであり、異議を唱えられないばかりか、彼の非を自らの非へと転嫁することになる。英雄化された男によって女が被害者となることに対する告発は、すでに『ソロモンの歌』においてなされた。『ソロモンの歌』では、妻と子を捨てて逃げながら、非難されず褒め讃えられる英雄の残酷さが照らし出され、ミルクマンという主人公によってまったく別の、男の「英雄」ならざる生き方が示された。ミルクマンはその名が示すように、もともとは男性中心主義的な性格ではないが、男性優位社会の中で「男らしく」ふるまうことを要求され、共同体で通用する「男らしさ」を演じていた。しかし、友人ギターと恋人ヘイガーとの付き合いを通して、自らが正しいと信じるふるまいを学びとってゆく。本論では触れないが、『ラヴ』のローメンはミルクマンと同一の過程をたどる。

この小説でも、コージーという男が黒人の英雄として崇拜され、彼の被害者までもがそう考えることによって、彼という人物をむしろ「創造している」ことが、強調される。コージーの神格化、すなわち男性権力の形成に自分たちが手を貸していたことに、ヒードとクリスティーンは最後になって気づく。

私たちは、ビッグ・ダディ [コージー] を至るところに求めるかわりに、手を取りあって自分たちの人生を生きることもできたんだよね。あの人は至るところに君臨していたけど、どこにもいなかったのかもしれないね。  
私たちが彼を作り上げたのかしら。

あの人が自分でしたことさ。

私たちがその手助けをしたのは確かだね。(291)

セサが有能な奴隷として奴隷制を支えていたことに気付いたように（『ピラヴィド』）、クリスティーンとヒードも自ら大君を支えていたことに気付くが、もちろんそのことが彼女たちの責任であるとはいえない。奴隷制、家父長制、植民地支配…あらゆる支配の制度は、被支配者をその制度の重要な支えに仕立て上げる、という点で罪深いのである。ヒードとクリスティーンが祖父の行為を自分の恥であると考えたことに、前記の制度は関係している。コージーのような立派な男に性的行為をさせた自分の中には「汚れ」がある、彼に触れられた時性的な興奮を覚えたことはその証拠ではあるまいか、とヒードは思い、一方クリスティーンも同様に、肉欲に溺れる祖父の汚れが自分の中にもあると感じ、そのことを知られると友人に愛されなくなることを心配し、二人はそれを互いに秘密にし、その秘密が二人を長年にわたって蝕み、人生を狂わせていった。

メニューに書かれた「愛しいコージーの子」が自分であることをそれぞれが主張して、クリスティーンとヒードはコージー館にともに住み、憎しみをぶつけあって、二十年間を過ごす。実に家父長権力は、二人の女を幼い時から老齢になるまで支配し続けたのである。しかし、ヒードとクリスティーンは彼女たちのやり方で、支配に抵抗してもいた。ヒードとクリスティーンは年に一、二回、行事が儀式のようにつかんだり殴ったりの喧嘩をした。クリスティーンは頑丈な体躯で、一方ヒードはからだ小さくて弱々しいが、敏捷で頭がいいので、両者はいい勝負になった。互いに互いのことを当人以上に熟知している二人の勝負が容易につくはずもなく、延々と喧嘩し続けた。喧嘩は二人が年に何度か肌と肌をふれあう貴重な機会であった。しかし、それだけでは二人は満足できなくなった—「友情と

同じように、憎悪は身体的接触以上のものを要求する。憎悪を維持していくためには、創造力とたいへんな努力が必要なのだ」(109-110)。こうしてみると、彼女たちの憎しみは愛と区別がつかないことがわかる。四六時中二人で生活し、互いのことだけを考え、互いを憎み続けることに尋常ならざる努力を払う二人。このような「純粹」な「憎悪」の中にいる二人は、「純粹」な「愛」の中にいるのとほとんど同じなのである。憎悪が愛であることに気付くためには、ほんの少しのきっかけで充分であった。

ヒードが秘書としてジュニアを雇い入れたのは、クリスティーンが相続の再審を求めて女弁護士のグウェンドレンの所に通い始めてからであり、クリスティーンに対する反作用的な行動である。二人の関係の中にクリスティーンが第三者を導き入れたことに対する意趣返しであるが、実はクリスティーンはグウェンドレンをつまらない理由のために敵にしていた。狡猾なジュニアはこのような二人に取り入り、漁夫の利を得ようとするが、まさに彼女が導き役となって、引き裂かれていた二人の愛情は復活することになるのである。それは一人の死という手痛い犠牲を払わなければならなかったけれども、二人は、二人きりでとり残されたホテルの中で、愛し合い、許し合い、ヒードは愛する人に抱かれて死んだ。ジュニアの悪意は、逆にクリスティーンとヒードに至福の時間を与えたのである。二人は、ジュニアの介入によって、今だけでなく、これまでもずっと、出会った時からずっと愛し愛されてきたことを知り、失われた五十年余を一気に取り戻すことができたのだ。

モリスンは、かつて一九九三年、ノーベル文学賞受賞講演の冒頭で、若者の手に握られている鳥を例にとり、言論についての考察をした。ある日、聡明なことで有名な盲目の老女のもとに、若者が訪ねて来、自分の手の中にいる鳥は生きているか、死んでいるのかをあててみろ、と彼女を挑発した。彼女は、「あなたが握っている鳥が死んでいるのか生きているのか、

私にはわかりません。ただ、その鳥はあなたの手の中にある、ということ  
はわかります。鳥はあなたの手の中にあるのです」(268)と答えた。彼女  
の意味するところは、鳥はいずれにしても死んでいる、ということである。  
なぜなら、たとえ生きていても鳥は権力の手の中にあり、殺すこと  
も活かすことも権力の意のままであり、そのような場合、鳥は死んでいる  
のと同じなのである。

『ラヴ』の二人の女は鳥として表象されている。ヒードの両手は関節  
の病気によって「鳥の手羽」(37)のように折れ曲がり、しっかりともの  
を持つことができない。彼女の手が無力さが繰り返して表現される(37, 41,  
106, 111, 131, 191, 194, 273)。この関節の病気は、ヒードの幼い頃の極貧の  
生活環境、栄養不良、衛生状態が悪いことからくる感染症に原因があると  
暗示されている。

フォークを親指と掌の間で支えて、ボストンレタスの葉を油と酢にま  
ぶし、オリーブを突き刺したり、オニオンリングをフォークの歯に引っ  
かけては何度も何度も落としながら、ヒードは何も食わずにしゃべり  
続けた。ジュニアは彼女の手がしているのではなく、手そのものを見  
つめた。小さく、一箇所の傷跡をのぞくと赤ちゃんのように滑らかな  
手。それぞれの手はもう一方の手の反対方向にゆるやかに曲がっ  
ている。まるで魚のヒレのようだ。(41)

「鳥の手羽」「魚のヒレ」と表現されたヒードの折れ曲がった手は、社会の  
中で見捨てられ、無力化された弱者存在の暗喩となっている。

また、クリスティーンが幼い頃に着ていた薄黄色の水着が、廃屋ホテル  
の引き出しから出てくるが、これはホテルに棲息するカナリアの色である。  
すなわち、ヒードとクリスティーンはそれぞれ鳥／カナリアとして表象さ

れている。一方、この廃屋となったホテルはビル・コージーの客観的相関物である。これによって、二人の女は、少女から現在の時までビル・コージーの手中にあり、彼が死して後もお彼の手中にある鳥であることが示されている。肖像画となってもなお家中を睥睨する彼は、ヒードとクリスティーンを支配するばかりか、ジュニアをも支配する。しかし、ヒードとクリスティーンが愛を取り戻した時、コージーの強力なオーラはジュニアが感じることができないほど弱まる（274-275）。一方は幼い頃からの貧困や不幸な結婚によって、もう一方は若い時からの悲惨な放浪生活によって、二人の女は筆舌に尽くしがたい苦労をなめてきた。そのような二人は、崩れ落ちそうなホテルに細々と棲息するカナリアとして表象されている。しかし、彼女たちが愛によって結びつくことによって初めて、自分たちの支配する力を弱めることができたのである。いや、自分たちを支配する力はそれほど強いものではないことに気付いた、と言った方がいいかもしれない。カナリア色は『スーラ』や『タールベイビー』に現れる黒人女性の衣服の色として印象深い色である。カナリア色は離れ離れになった女友達の、失われてしまったきずなを、もう一度繋ぎ合わせるためのキー・カラーともなる。また、幼いヒードとクリスティーンは、秘密の言葉「イダゲイ(idagay)」を使って大切な話をしていた。二人の合い言葉「ヘイ、セレスシャル」と同様、彼女たちにしか理解することができないこの言葉は、二人のホモエロティックな関係を暗示している。

Lはセレスシャルの魅力の虜になったことを告白していた。

彼女のすごい美貌を否定はできない。ほんとに虜になっちゃったよね。彼女の生計の立て方にはがっかりするけど、とても静かで奥ゆかしいやり方でやっているのだから、赤十字の看護婦さんかと思うくらいさ。(中略) コージーは彼女のお客を変えたっていうか、制限したけれど、ど

うやったって彼女の魔力を消すことはできなかった。死ですら何も変えることはできなかった。(164)

結末のシーンでは、Lとセレスシャル（の霊）は二人してコージーの墓に腰をかけ、ともに同じ歌を口ずさむ。彼女たちより若い二人の友人たちのように、生きているうちに互いを愛し、許し合うことはできなかったが、少なくとも死後の二人は仲良く隣り合って坐っている。次作『マーシィ』のテーマでもあるが、家父長制異性愛主義の社会構造においては、女たちは互いに求め合いながらも互いを裏切らざるをえない状況に置かれる。それでも、瞬間的にでもそれを乗り越える、もしくは乗り越えようとする女たちの姿が『ラヴ』には描かれている。二組の女たちの友情が、それぞれの障害を超えてたどりつこうとする「パラダイス」が描かれている。

## 注

1. ホテルの元従業員サンドラーは、コージーは誰かに殺害されたことを確信している（24頁参照）。同じく元従業員のヴァイダは、コージーの飲む水が白く濁り、彼が苦しそうに胃を押さえるのを見た。その時そばにいたのは彼女とLだけだった（54頁参照）。
2. 「愛しいコージーの子」とは、ヒードが産むことになっていた子どものことであった。ヒードは、一九五八年当時ホテルに宿泊していたノックス・シンクレアとの情事によって妊娠し、それをコージーの子として報告したが、結局流産した。セレスシャルとの関係などから不信をいだくようになったヒードとコージーはすれ違いを続けていたが、妻の妊娠を喜んで上機嫌になったコージーは、酔いにまかせて、ヒードの子に財産を与える遺言状を書いたと思われる。  
しかし、Lのメニューの裏に書かれたこのコージーの遺言が、Lによってまるまる捏造されたものである可能性も残されている（119,309頁参照）。
3. 拙論「閉ざされた水の下の欲望」と「あかずきんちゃん気をつけて」を参照。



4. ヒードを見て性的興奮を得たコージーが孫娘クリスティーンの部屋でマスターベーションをする点に、多くのヒントが隠されている。まず第一にコージーの少女性愛が明らかとなる。第二に、父ダニエルに似た灰色の眼をしたクリスティーンをコージーは嫌っていたはずだが、同時に愛していることがわかる。このことにより、コージーの父親に対する愛憎の複雑さを垣間見ることができる。コージーは父親を裏切り者として軽蔑していた。ダニエルは黒人の情報をこっそり政府に流し、白人から金銭や庇護を得て裕福な暮らしをしていた。彼は「アンクル・トル」ならぬ「ダニー・ボーイ」という愛称で白人たちの使い走りをしていた。コージーはこのような父を嫌悪しながらも、結局は自分も父と同じような道を歩んだのである。
5. 家父長権力の所有者コージーは、たんに権力を振り回す強い男として描かれているわけではない。優れた能力と野心をもちながら、黒人であるが故に数々の苦難を経験しないわけにはいかなかった。白人からの差別ばかりでなく、同胞の黒人には裏切られたと感じていたし、若者の横暴なふるまいにも黙って耐え、強い父の圧力にも耐えなければならなかった。「権力」はかならずしも憎むべき姿で現れるわけではない。しばしば弱さ、尊敬、同情を携えているが故に、それに立ち向かうことは困難を極める。

本稿は、2008年10月12日、日本アメリカ文学会第47回全国大会におけるワークショップ「鳥の表象－エスニシティーを越えて」において口頭発表した原稿に加筆修正を施したものである。本稿は、科学研究費補助金基盤研究C（課題番号21520272）の研究成果の一部である。

#### 参考文献

- Burr, Benjamin. "Mythopoetic Syncretism in *Paradise* and the Deconstruction of Hospitality in *Love*." *Toni Morrison and the Bible*. Ed. Shirley A. Stave. New York: Peter Lang, 2006. 159-174.
- Carlacio, Jami L. ed. *The Fiction of Toni Morrison: Reading and Writing on Race, Culture, and Identity*. Urbana, Illinois: National Council of Teachers of English, 2007.

- Davis, Thulani. "Not Beloved." *The Nation* (Dec. 15, 2003): 30-32.
- Denard, Carolyn C. ed. *Toni Morrison: Conversations*. Jackson: U P of Mississippi, 2008.
- Gallego, Mar. "Love and the Survival of the Black Community." *The Cambridge Companion to Toni Morrison*. Ed. Justin Tally. Cambridge: Cambridge UP, 2007. 92-100.
- Kakutani, Michiko. "Books of the Times; Family Secrets, Feuding, Women." Review of *Love*. *The New York Times* (Oct. 31, 2003): E37, E46.
- Mayberry, Susan Neal. *Can't I Love What I Criticize?: The Masculine and Morrison*. Athens: U of Georgia P, 2007.
- McDowell, Deborah E. "Philosophy of the heart." *Women's Review of Books* 21.3 (Dec. 2003): 8-9.
- Miller, Laura. "The Last Resort." Review of *Love*. *The New York Times*, Nov. 2, 2003 <[http:// query.nytimes.com/gst/fullpage.html](http://query.nytimes.com/gst/fullpage.html)>.
- Morrison, Toni. *Beloved*. New York: Knopf, 1987.
- . *Jazz*. New York: Knopf, 1992.
- . *Love*. Large Print Edition. New York: Random House, 2003. 『ラヴ』 大社 淑子訳 (早川、2005)
- . *A Mercy*. New York: Knopf, 2008.
- . *Song of Solomon*. New York: Knopf, 1977.
- . *Sula*. New York: Knopf, 1973.
- . Talk with Cornel West: "Blues, Love and Politics." *The Nation* (May 24, 2004): 18-28.
- . *Tar Baby*. New York: Knopf, 1981.
- . *Toni Morrison: What Moves at the Margin: Selected Nonfiction*. Ed. Carolyn C. Denard. Jackson: UP of Mississippi, 2008.
- Royon, Tessa. "A New 'Romen' Empire: Toni Morrison's *Love* and the Classics." *Journal of American Studies* 41.1 (2007): 31-47.
- Showalter, Elaine. "A tangled web." *The Guardian*, Nov. 29, 2003. <<http://www.guardian.co.uk/books/2003/nov/29/fiction.tonimorrison/>>.
- Wyatt, Jean. "Love's Time and the Reader: Ethical Effects of Nachtraglichkeit in Toni Morrison's *Love*." *Narrative* 16.2 (2008): 193-220.

鶴殿えりか「赤ずきんちゃん気をつけて—トニ・モリスンの『タールベイビー』  
における女どうしの絆」『英語文学とフォークロア—歌、祭り、語り』南  
雲堂フェニックス、2008年、212-29.

——。「閉ざされた水の下の欲望—トニ・モリスンの『スーラ』におけるホモ  
エロティシズムの行方」『越境・周縁・ディアスポラ—三つのアメリカ文  
学』南雲堂フェニックス、2005年、200-15.